

2023年1月1日（日）主日朝礼拝説教

『七転び八起き』井上隆晶牧師

箴言 24 章 13～21 節、マタイ福音書 2 章 13～23 節

①【この世を出て、神の国に向かう新しい旅をなささい】

新年明けましておめでとうございます。去年はコロナ禍に加え、ロシアによるウクライナ侵攻が起り大変な一年でした。今年は紛争が治まり、平和な年になってくれますように祈ります。皆さんの今年の目標は何ですか？私は去年は忙しかった事もあり、心が入らなかったことが多々あったことを反省しました。今年は特に信仰の友や家族のために、心を込めたいと思っています。

さて、イエス様は生まれてすぐにヘロデ王によって命を狙われ、エジプトに逃げることになりました。このエジプトへの逃避行は、預言されていたことでした。

『私は、エジプトから私の子を呼び出した』と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。(15 節) と書かれています。これは旧約聖書ホセア書 11:1 からの引用です。だからこの物語はイエス様の「新しい出エジプト」を意味しているのです。イスラエルの歴史を繰り返すことによって、古いイスラエルの民の不従順を回復しているのです。イエス様と共に旅をするヨセフとマリアは新しい信仰の民として描かれています。こうしてマタイは、イエス様こそモーセに告げられていた「新しい預言者・メシア」(申命記 18:15) であることを証明しようとしているのです。信仰生活とは、イエス様と共に天国という約束の地に向かって「この世を出る旅」なのです。私たちは新しい年も、前に向かって歩みたいと思います。

②【キリストを生かすために何度も起きなさい】

ヘロデは怒って、ベツレヘムの二歳以下の男子を一人残らず殺しました。誰がイエス様か分からないからです。クリスマスに信仰が芽生えても、その信仰を殺そうとする悪魔的な力が働いていることをこの物語は教えようとしているのです。ヘロデは今でもこの世に働いています。教会に行くのを止めさせようとし、聖書を読むことも祈ることも止めさせようとし、そのままなら信仰は死んでしまいます。しかしこの物語は同時に、イエス様(信仰)を必死に守ろうとした人がいた、ということも伝えています。ヨセフとその母マリアです。ヨセフがどうやってイエス様を守ったかを学びましょう。ここには4回も「起き上がる」という言葉が出てきます。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げなさい」(13 節)、「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り」(14 節)、「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい」(20 節)、「そこでヨセフは起きて…イスラエルの地へ帰って来た」(21 節)。彼には夢のお告げに対する迷いは見られません。彼は夢のお告げを素直に受け入れてすぐ

に行動します。彼は愚直までに、夢のお告げ（神の言葉）に従う人でした。神の言葉というのは、学ぶものではなく、実践するものです。最近はそのような人が少なくなりました。昔の人たちはすぐに従いました。「絶えず祈りなさい」といわれたら、どうしたらそれができるのかを本気で考え、実行しました。私が榎本保郎牧師が好きなのも、彼の信仰がばか正直だからです。だからこそ奇跡のようなおもしろい話が多いのです。

● 「信仰は考えることによってではなく、実行することによって得られる。言葉や考察ではなく体験が神を教えてくれる。窓を開けない限り、新鮮な空気は部屋に入れられない。日光浴をしない限り、肌は黒くならない。信仰を得ることも同様である。教父たちが言っているように、ただ楽に腰かけて待っているだけでは、私たちは目標に達することはできない。放蕩息子をまねよう。彼は立って、出発した。…アブラハムは出発した時75歳だったという記録には深い意味がある。夕方になってから働き始めた労働者たちが朝から働いた人々と同じ賃金をもらったのである。…引き延ばすことなく、今すぐやり直しなさい。」（『行者たちの道』より抜粋）

このヨセフの愚直な信仰に倣いましょう。信仰は単純になることです。

③【悪は必ず滅び、善（キリスト）が残る】

父なる神様は、ご自分の独り子であるイエス様が迫害されても、すぐに手を下してヘロデを滅ぼすことをしませんでした。イエス様は殺されそうになって逃げ回っています。何でイエス様はこんなに弱いのだろうと思います。それは今も同じです。教会はこの世の力、病気の力、悪の力の前で何とも無力に見えます。神はなぜ悪を滅ぼしてくれないのかと思います。それは、私たちの信仰を試しておられるのだと思います。ここを読むと「逃げ」「とどまり」（13節）、「去り」（14節）、「引きこもり」（22節）といった言葉が並んでいます。前に進むだけが信仰ではありません。逃げても良い、引きこもり、とどまって良いのです。モーセもミディアン地方に40年引きこもり、パウロも3年間アラビアに退きました。悪と面と向かって戦うのではなく、悪から逃げても良いのだと思います。

神様はこれらの物語を通して、悪は自滅するから放っておきなさい、ということをお教えているのです。イエス様は、十字架におかかりになる前にも同じことを言われました。「もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者が来るからである。だが、彼は私をどうすることもできない。」（ヨハネ14:30）その通り、人々はキリストを捕らえ、十字架で殺し、墓に入れ、封印しましたが、三日目に復活してしまいました。悪も死も墓も封印もイエス様をどうすることもできませんでした。いくら抵抗しても神の救いの計画は着実に進むのです。どんなにこの世に悪が満ちても、善を滅ぼすことが出来ません。どんなに死の力が強く見えても、神の命を殺すことは出来ないのです。聖書をよく見ましょう。「ヘロデが死ぬまでそこにいた。」（15）、「ヘロデが死ぬと」（19）、「この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった」（20）、と繰り返して「死んだ、死んだ、死んだ」と書かれています。ヘロデは必ず死にます。神に敵対する者は必ず滅びます。「見よあなたか

ら遠ざかる者は滅びる」(詩編 73:27)「神に逆らう者の野望は滅びる」(詩編 112:10)とも書かれています。そしてキリストだけが残るのです。キリストが残る時、キリストと共にいるわれらも残ります。だから恐れてはなりません。この世の「悪」のことで心を煩わすよりも、「キリスト」を信頼する信仰を養うことに時間を使いましょう。

今日読んだ箴言の中に「神に従う人は七度倒れても起き上がる」(24:16)という言葉が出てきます。日本のことわざだったら「七転び八起」です。なぜ起き上がるのでしょうか。それはキリストが起き上がる(復活する)からです。キリストが起きる時、キリスト教徒も共に起き上がります。人間の力ではありません。少し先を読むと「悪人には未来はない」(24:20)とあり、神に従う人は「確かに未来はある。あなたの希望が断たれることはない」(23:18)とあります。なぜならキリストが未来だからです。

●金城学院大学学長の小室尚子先生は興味深いことを言っています。日本人は、時間というものは循環的に回り続けると考えており、この歴史が終わると考えている人は少ないというのです。しかしキリスト教は違います。「キリスト教は時間を直線的に考えます。つまり、神によって造られた時間は、神に導かれて、ある目的に向かって進んでいるものであり、繰り返すものではなく、一刻一刻が意味をもって進んでいるという見方です。時間は繰り返さないとする時、初めて一時一時に意味があるようになるものです。」「この歴史は終わるのです。神の国は、全く新しい形で神が造られるもので現在の時間の延長線上に建てられるものではありません。」

一休さんは髑髏の付いた杖について「門松や、冥土の旅の一里塚。めでたくもあり、めでたくもなし」と詠んだといひます。正月が来るたびに死が近づくというのに、死の準備もせずただ喜んでいて、何がめでたいかと皮肉ったようですが、私たちキリスト教徒は、正月が来るたびに神の国の完成が近づいていると考えましょう。この新しい年をキリストが先導してください。主は私の手を取って導いて下さいます。主は私の中に住みこの2023年を共に歩んでください。私は未来と共に歩むのです。私は終わることのない国と共に歩むのです。最後に残る者と共に歩むのです。平安の秘訣はそこにあります。